

	<p style="text-align: center;"> エッセイ 歌う楽しみ SCE・Net 牛山 敬 </p>	<p style="text-align: center;"> E -24 発行日 2011.03.02. </p>
-----------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------

現役を数年前引退した際、それまで時間的に叶わなかったコーラスを楽しむことにした。学生時代少しやっていたこともあって、時々風呂に浸かりながら唸っていた。だが、合唱には一人では味わえない抗し難い魅力があるようだ。

齢を重ねるごとにいろいろな身体の機能が低下するが、健康法として腹式呼吸を勧めている医者も多い。歌うことは、まさに腹式呼吸をすることになり、健康にも役立つというものである。

たまたま、知人が入っていた合唱団が団員募集しているというので、見学に行ってみると、テナーが不足しているのでは是非というのでそのまま入団してしまった。その合唱団は団員が130～140名位の大規模な合唱団であったが、テナーは少なく、常時練習に出てくるのは15名程度であった。その時やっていた曲はベルディのテデウムという曲であったが、テナーだけでも4部に分かれ1パート3～4名と大変な曲であった。

久しぶりに本格的に歌ってみると、音程には自信があった積りだったが、寄る年波で出す音が自然に下がっていたようだ。指揮者がもっと音程を高く取れと口を酸っぱく注意するが、自分ではそれがどうも良く分からない。ある時、テナーのそのパートが2名しかいなかった。どうもテナーの音程が低いと指揮者から何度もやり直しされる内に、どうやら後ろに座っていたもう一人が歌うのをやめてしまったようだ。知らずに歌っていて、10分以上も全員の前で個人レッスンを受けてしまった。挙句の果て指揮者は匙を投げて、音の取り方をもっと勉強するようにとのたまわった。

そんなはずがないと、デジタルレコーダーを買ってきて自分の声を録音してみたところ、なんと哀れなほど音程が低く、これでは指揮者が何度も駄目だしをするはずだと納得した。どうやら自分の声は、骨を伝わって直接聞いているので、外に出ている声と音程すらも異なっているらしい。これ以後、必ず自分の声を録音してチェックするようにしている。

テデウムだけでなくこの時メインで歌った同じベルディのレクイエムは、今でも好きで良く口ずさんでいる。特に最後の曲リベラメの前半最後の部分は和音の展開が実にすばらしく何度聞いても飽きない。市販の録音盤はソプラノソロの音を大きく録音するため、バックで歌うコーラスの和音の展開の美しさがよく聞こえず、誠に残念であるが、こういうところを味わえるのが自分で歌うコーラスの楽しさであろう。

その後、喉を痛めてしまい1年間でその合唱団をやめてしまったが、小生はやはり歌痴の部類に入るようだ。どうしても何か声を出してないと気が済まず、世界の民謡や愛唱歌風の曲を歌っている近所の合唱団に入って楽しむようになった。和気藹々とした雰囲気が好きで続けているが、困るのはまたまたテナーが少なく、時に一人で歌わざるを得ない

こともある。この地域は非常に音楽連盟の活動が活発で、春のフェスタだ、秋の祭典だと
いろいろな音楽団体が演奏する機会が多い。そこで、我が合唱団も出演するのであるが、
どうも最も下手な部類に入るらしい。でもそんなことは皆気にせずに楽しんでいる。この
ような音楽に親しむ土地柄もあって、この地域では年に1、2回団員を一般から募集して
大曲をやる。

昨年夏には、モーツァルトのレクイエムを昭和女子大の人見記念講堂で、コソボフィル
と共に歌う機会があった。このコソボフィルはコソボ唯一のオーケストラで、その指揮者
が小生の住む地域と縁のある日本人である。そのご縁で、コーラスメンバーが募集され、
それに小生も参加することができた訳である。

コソボという国は元ユーゴスラビアの中のセルビアから数年前独立したばかりで、大半
がアルバニア人の国だそうだ。現在もセルビアと戦争状態にあるようで、依然国連の管理
下にある。セルビア人にもアルバニア人にもこの戦争は心に傷を残す激しい民族の争いで
あったようだ。最近、日本もコソボの独立を承認し、国交が樹立された。その記念のため
のコソボフィル日本公演が実現したのである。

この指揮者はコソボに住んでいて、このような民族の争いを超えて、セルビア人もコソ
ボ人（アルバニア人が大半）も同じオーケストラと一緒に演奏できないかと苦心されたよ
うだ。最初は団員のつらい思いを断ち切るのが難しかったようであるが、指揮者の努力が
実り、両国から団員が集まり、国連の保護下ではあったもののお互いの国で一度ずつ演奏
会を開くことができたそうだ。この演奏会后、団員が「音楽に国境はないのが心から実感
できた」と嬉しそうに話してくれたそうである。ただ、残念ながらこのような交流はその
後は行われていないようだ。

ところで、昨夏の演奏会はショスタコービッチの戦争を思い起こされるような管弦楽で
始まり、団員の一人が作曲した平和への願いの曲、続いてモーツァルトのレクイエムで終
わった。最後のレクイエムのコーラスは、この曲に相応しくないような200人を超える大
メンバーによるもので、音色はどうであったか分からないものの、迫力のあるものとなっ
た。それが却ってコソボフィルの人達にとっては、親しい人達への鎮魂の曲となって迫る
ものがあったようだ。終了後の懇親会では皆嬉しそうな顔をした団員の方々の姿が印象的
であった。



今まで演奏会が終わっても、オーケストラのメンバーと接触する機会は殆どなかったが、今回コソボフィルのメンバーの素顔に接することができ、民族の違いはあっても共に楽しみ共感できるということを実感し、音楽の素晴らしさがこのようなところにもあるのかと感慨深いものがあった。今回、日本に来たメンバーは全員アルバニア人で、初めて日本に来たとのことであったが、わが国で温かい歓迎を受けて、戦争のない日本の国の良さを実感できたようである。

そろそろ、古希を迎える年になったが、一応3大レクイエムと呼ばれる曲を全部歌うことができ、終末の準備はできたが、まだまだバッハやブラームスなど歌いたい曲は沢山ある。いつまで声が出せるか分からないが、当分は機会があれば歌う積りである。

(おわり)